

大学院口腔科学教育部研究奨励賞研究成果報告書

口腔科学教育部 地域医療福祉学分野 北村 美渚

研究課題名 高次脳機能障害者の相談面接における質問に関する研究
—意思決定支援のための予備的検討—

1. 研究目的と成果内容

【研究目的】

疾病や事故により脳を損傷した高次脳機能障害者に対する意思決定支援の予備的検討として、高次脳機能障害者と高次脳機能障害支援コーディネーター(以下、Co と略す)の相談面接場面における Co の質問に着目し、質問形式について分析検討することを目的とした。

調査 1 は、Co 歴 10 年の Co1 名を対象とし、高次脳機能障害者 11 名に対する相談面接場面での質問を分析検討した。予備調査を行った後、同 Co に計 7 日間同行し、Co の質問をすべて記録した。記録した質問は、予備調査での結果を踏まえ、オープンクエスション(Op)、セミオープンクエスション(SeOp)、セミクローズクエスション(SeClo)、クローズクエスション(Clo)の 4 つの質問形式に分類し、その回数を集計して形式別に統計分析を実施した。調査 2 は、Co3 名を対象とし、社会的行動障害を有する高次脳機能障害者と有さない者に対する相談面接場面での Co の質問をすべて記述回答させた。その質問は調査 1 と同様に回数を集計し、形式別回数を 2 群間比較した。分析は IBM SPSS Statistics 24 を用いてマンホイットニーの U 検定を行い、有意水準を 5%未満に設定した。なお、目的や調査方法について、松山リハビリテーション病院倫理審査委員会の承認を得て本研究を実施した(承認番号 17042101)。

【研究成果】

調査 1 では、相談面接場面において Clo が最も多く使われていることが明らかになった。また、社会的行動障害を有する者に対するオープンな質問(Op と SeOp)の回数は、有さない者に対するそれに比べて有意に少なかった($p=0.009$)。調査 2 においても調査 1 と同様に、Clo が最も多く使われていた。また、社会的行動障害の有無とオープンな質問(Op と SeOp)の回数に関する有意差は認められなかった。

以上より、高次脳機能障害者に対する相談面接において、支援コーディネーターはクローズな質問形式を多用しており、特に社会的行動障害を有する者に対してはオープンな質問形式を用いることが少ない傾向が示された。

2. 自己評価

本研究では、高次脳機能障害者の相談面接場面の質問という、未だ介入されたことのないテーマを扱った。本研究結果より、研究の限界と今後の課題について以下の2つを挙げる。1つ目は調査1のような観察研究では高次脳機能障害者の個人情報の問題や調査に相当な時間と労力を要することで複数のCoからデータを採取できなかった。そのため本研究結果は高次脳機能障害者の意思決定支援における予備的検討にとどまる。今後は、より簡便な調査2の方法を導入することで対象者数を増やすことが必要であろう。2つ目は、高次脳機能障害者の多彩な症状に対応できるよう、相談面接場面における質問だけでなく、応答の分析、分類も合わせて行うことが求められる。

高次脳機能障害は若年で受傷することが多く、意思決定を迫られる場面に多く遭遇することが考えられる。本研究結果は、そのような高次脳機能障害者の意思決定支援の定式化に向けた新たな知見を示すものである。また質問形式の選択は、高次脳機能障害者とのコミュニケーション技法の一つであり、多くの臨床場面で活用できる可能性が高く、高次脳機能障害者の意思決定支援の確立に向けた一助となり得る。以上より本研究は、今後の課題を含め大変意義のある研究であったと考える。

3. 学会発表

- ・高次脳機能障害者支援の意思決定支援の定式化にむけた一考察。第1回徳島県地域包括ケアシステム学会，徳島，2017年8月27日。北村美渚，白山靖彦，木戸保秀，伊賀上舞。ポスター発表。
- ・高次脳機能障害者の相談面接における「質問」に関する研究。第41回高次脳機能障害学会，埼玉，2017年12月15,16日。北村美渚，白山靖彦，木戸保秀，伊賀上舞。口頭発表。

4. 論文

- ・高次脳機能障害者(意思決定支援における工夫)。臨床精神医学, 46巻, 12号, 1527-1532, 2017。白山靖彦，臼谷佐和子，北村美渚。